

新しい旅の「兆し」 ～心地よさの源泉を探る～

2023年6月13日

株式会社JTB総合研究所
株式会社TBWA HAKUHODO



2021年度

自主研究
『社会と旅行の未来への道標を探る』

『新しい時代に対応する観光復興ガイド』

今後の社会における生活者の価値観変化のポイントの兆し

「よりよいこと（成長）」から、「より心地よいこと」が優先される

以下の共同調査から「新しい旅のあり方」を探る

2022年度

「心地よさ」の心理構造分析

実証実験による「心地よさ」の具現化

✓ 「心地よさ」に求めることを、2021年度までの調査結果から仮説を立てたうえで定量調査・分析を実施

✓ 2021年度のそれぞれの調査から導き出された結果と、心理構造分析の結果を合わせ、「心地よさ」を実現する実証実験のツアーを実施

: 共通点

1

ベースとなる
意識の変化

- ✓ テクノロジーの進化による利便性は享受したい
- ✓ 自分が生きていく環境の維持に役割を果たすべき
- ✓ ヒエラルキーの階段を上ることより「自分自身の価値観」を大事にしたい

2

これからの
「自己と他者との
関係性・居場所」

「選択と集中」

本当に
大切なものに
時間やコストを
集中したい

「分身化」

日常の中で
複数の“居場所”や
“顔”を上手に
使い分けたい

「逃避」

型にはまった
日常を離れたい

3

旅行変化の
「兆し」

1. 共に創る・成長ストーリーを共有する
2. 新しい「旅育」づくり
3. あえて不便さや時間を楽しむ体験の提供
4. 実際に旅行できなくても、応援できるしくみづくり
5. 消費者とのゆるい関係性づくり
6. 既存の「空間」だけにとらわれない、「日常を離れられる場」の提供
7. 観光やツーリズムの枠組みを超えた、新しい組み合わせの探索

: 共通点

旅行意欲を高める24の兆し

大自然	応援	再訪	趣味旅	旅館風景	おひとり様
地元色	写真好き	繋がり旅	ペット愛	オフ シーズン	バーチャル 旅行
ワーケー ション	マイクロ ツーリズム	リベンジ 旅行	おこもり ステイ	貸切旅	ウェルネス
ワンランク上	〇〇レトロ	はしご旅	ロード トリップ	早朝/深夜	旅育

「心地よさ」を深堀する

1. 共分散構造分析による「心地よさ」の心理構造の分析
2. 実証実験による「心地よさ」の具現化

実施事項

「心地よさ」の深堀

「心地よさ」の
心理構造分析

実証実験による
「心地よさ」の具現化

「心地のよい場所に、心地のよい状態にいる」とは（2021年度JTB総合研究所の研究結果より）

自分の興味や関心を共感できる

- インターネットやSNSの広がり、自分と同じ興味や関心を持つコミュニティに帰属することが簡単になり、興味や関心事を共有し、共感できる関係性がより重視されるようになっている。

無理にがんばらなくてもいい。
嫌になったらフェードアウトも
リセットもできる緩さがある

- 多くのコミュニティに帰属し、常時接続で関係性を維持することは、ストレスにもつながる。そのため、嫌になったら気軽に止めることができる「緩さ」が心地よさの条件となる。

多数の選択肢の中から自由に
組み替えられる、
選択できる柔軟性がある

- ライフスタイルの変化やテクノロジーの進化によって、様々な選択肢が手に入るようになった。「緩い」関係性の中では、柔軟に状況や目的に応じて、「場」や「関係性」を使い分けることが居心地の良さのポイントとなる。

自分の役割や存在意義を
感じることができる

- 一方で、自分の役割や存在意義を感じることができる場所はこれまでと変わらず存在し、リアルの価値の見直しとともに、改めて大切さを実感するようになった。

【共分散構造分析を用いた、心理構造の分析】

- 共分散構造分析とは、あらかじめ持っている仮説やロジックを構成する要素について、パス図を用いて構造モデル化し、それぞれの要素間の関係性を検証していくもの。

昨年度、得られた「心地よさ」についての仮説をもとに
アンケート調査を実施



得られたデータから、因子分析や相関分析などを行い、
因子や要素間の関連性からパス図を作成

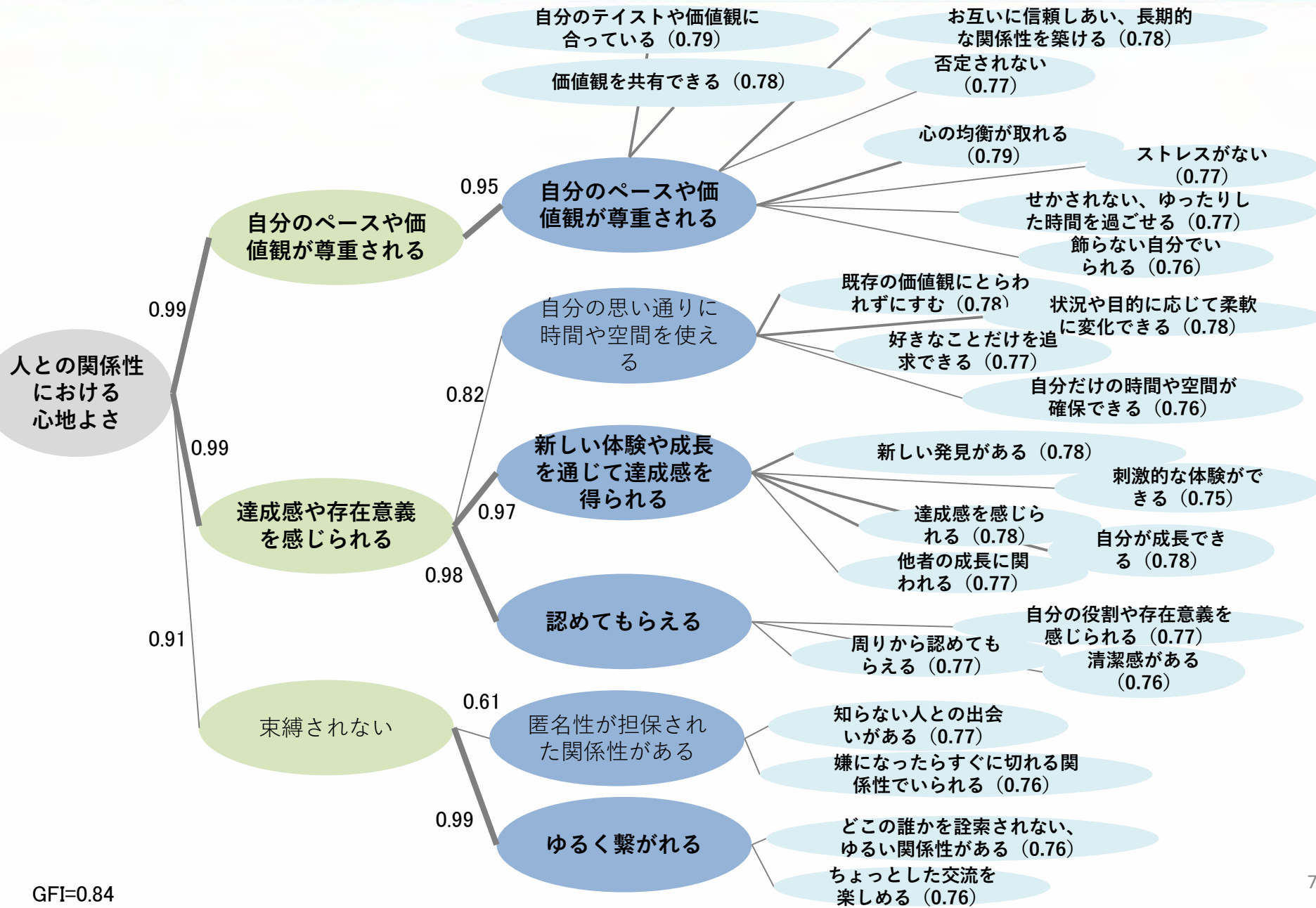


共分散構造分析でパス図の妥当性を判断し、修正

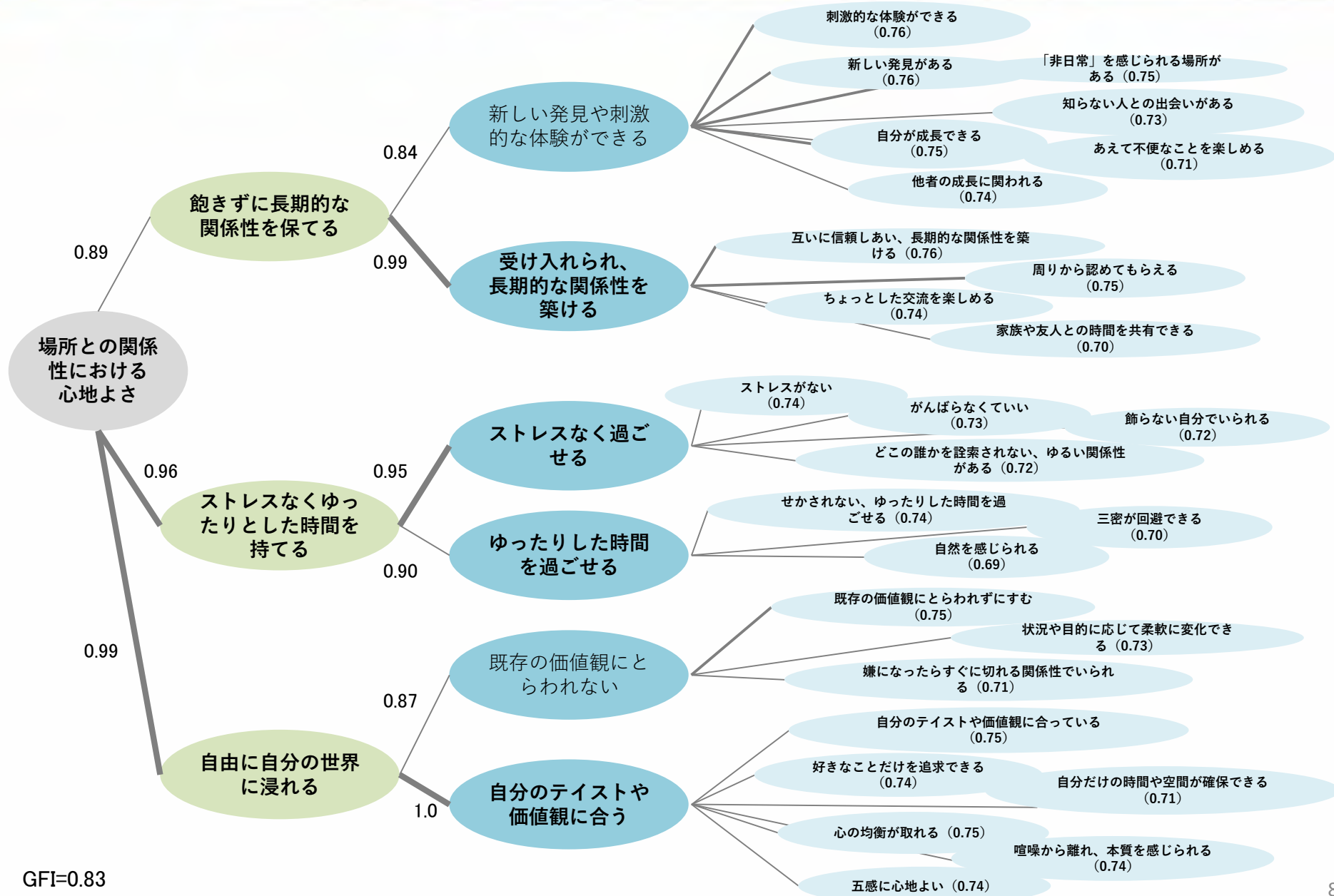


構造化した要素間の関連性(重み)を分析

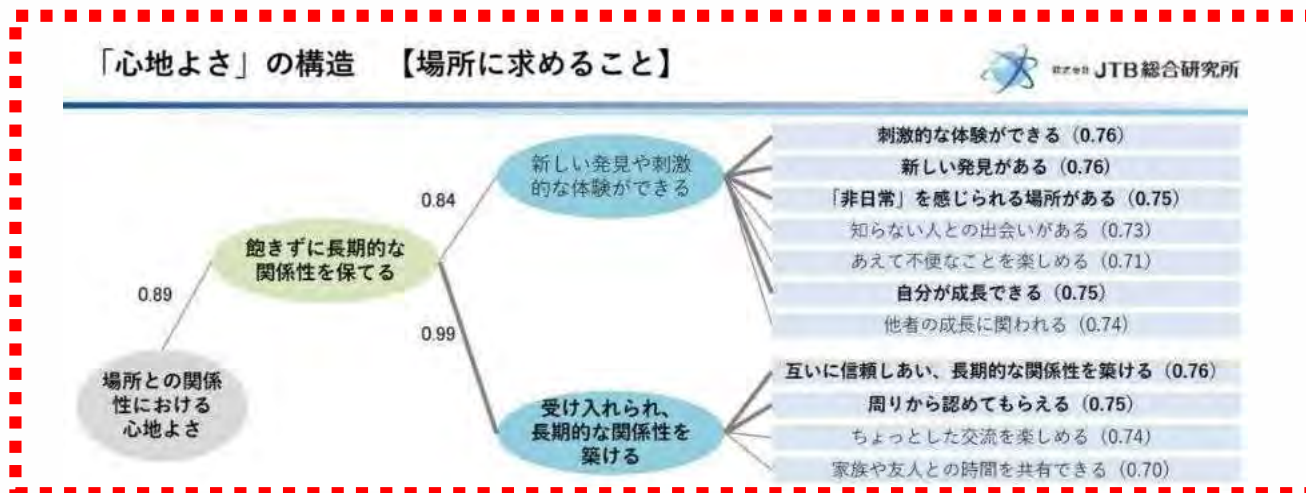
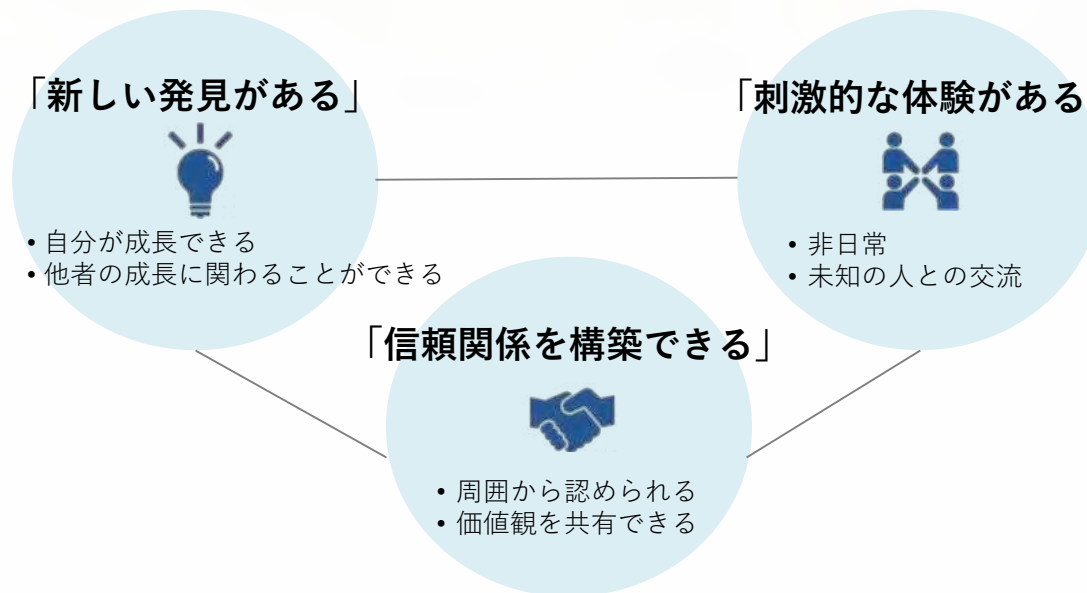
「心地よさ」の構造 【人に求めること】



「心地よさ」の構造 【場所に求めること】



以下のような要素を提供し、「心地よい場所」を目指す＝地域と人との継続的なつながり（関係人口の構築）を創出できる可能性がある



「心地よさ」を深掘する

1. 共分散構造分析による「心地よさ」の心理構造の分析
2. 実証実験による「心地よさ」の具現化

実施事項

「心地よさ」の深掘

「心地よさ」の
心理構造分析

実証実験による
「心地よさ」の具現化

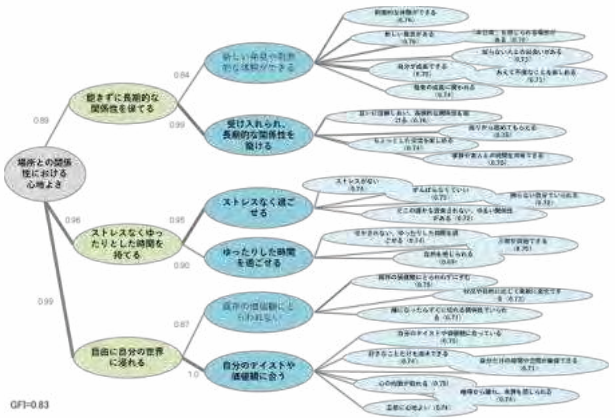
2021年度における、異分野の有識者とのディスカッション（JTB総合研究所） × ソーシャルリスニング（TBWA HAKUHODO）から得られた「新しい旅の兆し」の要素と、「心地よさ」の心理構造分析で重要となった要素を盛り込み、「心地よさ」を実現するツアーを実施する





実証実験のテーマ：
「心地よさ」を体験する5つのステップ

- STEP1：日常からの逃避
- STEP2：不便益への没頭
- STEP3：地域人との共創
- STEP4：価値観の再認識
- STEP5：旅後も続く関係



目的

- 「兆し」を実際の体験に落とし込むためのプロセス（計画～実行）を検討する
- 体験した旅行者にとって、どのような場面がより印象深かったかを把握し、「兆し」から考えられた新しい旅の形の可能性を探る

参加者

- プロジェクトメンバーから声をかけ、参加していただける方
* 旅行業の観点から広く募集は行わない

実施方法

- これまでの研究結果やインターネット調査から得られた結果をもとに体験プログラムを作成し、実証実験を実施

サンプル数

- 5名

実施場所

- 山形県最上地域

実施日

- 2022年11月5日～6日（1泊2日）* 現地集合、現地解散

Concept

もかみ

最上くらし旅

わたしにとって、理想のくらしはなんだろう。

都市のくらしは、たしかに便利だ。

美味しいもの、有名なもの、刺激的なもの、欲しいものはなんでも手に入る。

でも、それって心地いいのかな。

目が覚めたら、とりあえずSNSを開いて新たな「欲しい」を探す。

外の世界には詳しくなれるのだけど、自分のことはどこまでわかっているんだろう...

都市から遠く離れた里山で、自然とくらす人がいるらしい。

目の前の四季に向き合い、毎日のくらしを自分でつくっているという。

その人のくらしは、考え方は、わたしとなにが違うのかな。

最上へ、わたしがまだ知らないくらしに会いに行こう。

1 自然を満喫する

【幻想の森】

- ✓ 樹齢1000年を超える杉が多く自生し、京都の芦生杉、富山の立山杉と並び最大規模を誇る
- ✓ JR新庄駅から車で約40分



【サケの遡上】

- ✓ 最上地域にある鮭川村でサケの遡上を見学
- ✓ タイミングが合わないと見ることができない
- ✓ 川の流れに逆らい、必死に上流を目指す姿には生命の神秘と躍動感が感じられる



2 暮らしを体験する

- ✓ 降り積もる雪で木が倒れないために毎年、「雪囲い」を行う
- ✓ 暮らしの知恵がつまった手料理を知る
- ✓ 季節に合わせた郷土料理を味わう



①日常からの逃避

②不便益への没頭

③地域人との共創

④価値観の再認識

⑤旅後も続く関係

STEP 1

日常からの逃避

東京から新幹線で3.5時間。
本州なのに遠いこの距離と時間が、
型にはまった日常から解放してくれる。



出典: Google Map

<https://www.google.co.jp/maps/?hl=ja>

①日常からの逃避

②不便益への没頭

③地域人との共創

④価値観の再認識

⑤旅後も続く関係

大自然で“感覚”に向き合う：樹齢1000年の「幻想の森」を訪れ、日常とは違う体験を提供

参加者の感想



- ・ 自然のままで、道が整理されていない
⇒ 地元・中国の道を思い出す



- ・ チップが敷いてあって簡単に歩けたけれど、幻想的で観光地化されていなかった



- ・ 杉の生命力やパワーが感じられた

①日常からの逃避

②不便益への没頭

③地域人との共創

④価値観の再認識

⑤旅後も続く関係

STEP 2

不便益への没頭

自然と共生する暮らしに向き合うことで
時は金なりの都会的ビジネス思考から離れる。



①日常からの逃避

②不便益への没頭

③地域人との共創

④価値観の再認識

⑤旅後も続く関係

自給自足の暮らし：新庄市で一人暮らしをする高橋喜久子さんのお宅で、ご自身で育て、採った食材を使った山菜の天ぷらや漬物をいただいた。また、いぶりがっこづくりを通じ、燻小屋や火起こしの体験などを経て普段意識していなかった生産の過程に目を向ける時間を過ごした。



- たくあんは知っているけど、燻製は知らなかった
- 1週間かけて美味しいものをつくる
⇒なんでも時間をかければ時間の厚みが良いものをつくる



◀ ご自宅の庭のモミジ、
山椒の葉の天ぷら



▲ふきの漬物



- 普段から、お漬物はスーパーで買わず、自分で漬けている。季節のものはなるべく自然な形で食べる、という感覚は新鮮だった

①日常からの逃避

②不便益への没頭

③地域人との共創

④価値観の再認識

⑤旅後も続く関係

ぼた餅づくり：くるみを割るところから始まり、効率を求める都会とは時間の使い方が違うこと等への気づきを得た



- （喜久子さんは）時間をかけることを「当たり前」という
- 都市では効率性を求められる
⇒そうでなくてもいい



- 「暮らしの年輪」を感じた



- 効率を重視しなくても生きていけるってことだから豊かなことだと思った



①日常からの逃避

②不便益への没頭

③地域人との共創

④価値観の再認識

⑤旅後も続く関係

STEP 3

地域人との共創

出会ったばかりの人と同じ目的を共有。



①日常からの逃避

②不便益への没頭

③地域人との共創

④価値観の再認識

⑤旅後も続く関係

お昼ご飯づくりと食事：2日目は参加者が自分たちで、山形の郷土料理である納豆汁やぼた餅を作って一緒に食事をする事で、協力し合う関係性を作った。



- 1日目の食事は、喜久子さんが作ったものをいただいたが、2日目の食事は自分たちで作って食べたのがよかった
- 人の温かさや協力することの心地よさを発見した

①日常からの逃避

②不便益への没頭

③地域人との共創

④価値観の再認識

⑤旅後も続く関係

「雪囲い」づくり：全員で助け合い、雪害を防ぐために縄や竹、木材などを使って樹木を囲う「雪囲い」の作業を手伝った。雪囲いの体験をきっかけに、初対面の参加者同士、達成感や連帯感が醸成された。従来はその土地の人が一人でやらなければならない雪囲いを、みんなで作業することで、現地の人は助かり、参加者は普段できない体験に喜び、Win-Winの関係性が構築できた。

参加者の感想



- 雪囲いの木を運んだり、手伝いをして喜んでもらえたとき、**心地よいと感じた**
⇒元々、実家の近くでも近所の人の手伝いをしていたこともあった



- 雪囲いなどみんなで一緒に何かできたことで、やっと**仲間感ができた**
- 雪囲いを一人でやってるのにびっくり！
⇒雪国に太っている人が少ないのは、やらなければならないことが多いから？



- 雪囲いなど、初めてやることがあって、不安な気持ち、タフな気持ちがあったが、その分、**達成感を得られた**
- 一緒に参加したメンバーと**チームとなれた感じがあった、相性がよかった**



- 庭木を大事にしたい気持ちは分かるけど、**そこまでして守らないといけないものか？**と感じた
- そこまでして守りたいなら、自治体単位で協力していく方が建設的だなと思った

①日常からの逃避

②不便益への没頭

③地域人との共創

④価値観の再認識

⑤旅後も続く関係

STEP 4

価値観の再認識

今までの自分のくらしと、
今回体験したくらしのギャップを振り返る。



①日常からの逃避

②不便益への没頭

③地域人との共創

④価値観の再認識

⑤旅後も続く関係

チェックインの実施：旅の始めに、自分はどのような人間であるか、今この場で感じていること等を話し、ありのままに自分の気持ちを話し、それを受け入れてもらえる場を提供した。

感じたことの共有：旅の最後にも、お世話になった高橋さんを囲み、この旅を通じて自分たちが感じたことを共有する場を設けた。

参加者の感想



(チェックイン時)

- 自分はポジティブな人間
今、とても寒いけど、熱燗飲んだら気持ちいいだろうな、とポジティブに考えを変換できる

(感じたことの共有)

- 喜久子さんの生活の知恵や、雪囲いの木を大切にしてきたと分かる姿や、一緒に過ごしてきた人、関わってきた人の温度感も感じられたことがとてもよかった



①日常からの逃避

②不便益への没頭

③地域人との共創

④価値観の再認識

⑤旅後も続く関係

STEP 5

旅後も続く関係

価値観を共有した仲間や地域の人とつながる。



①日常からの逃避

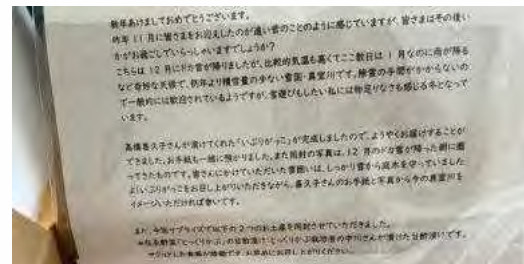
②不便益への没頭

③地域人との共創

④価値観の再認識

⑤旅後も続く関係

- ・ 旅後も続く関係を後押しするため、初日に体験したいぶりがっこ作りの完成後、参加者の自宅にいぶりがっこが届く
- ・ 雪囲いが活用されている様子の写真や、喜久子さんからの直筆のお手紙が同封される



参加後インタビュー

- ✓ 実証実験後、参加者から2日間の体験に関するインタビューを行い、今回の旅の可能性を探る

<インタビュー内容>

- ✓ 体験したことの中で、印象に残っていること
(自然風景、交流した人、その他)
- ✓ 体験の満足度
- ✓ 訪れた場所への再訪意向
- ✓ SNSなどでの共有の有無、終了後の共有意向
など



- ツアーに参加するきっかけは、**行ったことがないこと・自力では体験できないこと**への関心が高かった

Q: この旅のどんなところが面白そう、と感じて参加しましたか



- ゼミの先生からの紹介。**東北は自分にとって行かないところ**
- 研究テーマが少数民族について。**日本で経験できるかも**と思った
- 資料の「豊かな暮らしってなんだろう」だけ見ていくことを決めた



- 山形は**行ったことがなかったので行ってみたかった**、東京以外の空気を吸いたかった
- ツアーの詳細を聞いていたわけではなく、「土日、山形来れる?」「おばあちゃんの家に行けるらしいよ」とお誘いがあった



- 普通の**自力の旅では経験できないことが出来そう**だった、事前の情報は少なかった
- 今も暮らしている人のお宅にお邪魔して体験させてもらう
- 自分では、**旅行先として選択しない場所だった**
- コロナになって遠出しづらくなっているので、この旅は安心して参加できた



- いぶりがっこと焚火が楽しそうと思った。⇒**やったことがないことは楽しそう、わくわくした**
- チラシの時点では、**喜久子さんの家に行くのは魅力的ではなかった**
⇒一般の人の家に行くのは気を遣う感じ。個人の名前を言われても分からないし、何ができるのかが読めなかった



- 未知の体験をしようと思って来た**、情報がなさすぎるところ
- 自分自身が田舎出身ということもあって今まで関わってきたおばあちゃんたちも似たような暮らしをしているから**暮らしを見たいという感覚はなかった**
- 自分が地域に携わる仕事をしているから、何かプラスになればという思いがあった

心地よさの構造

場所

新しい発見や刺激的な発見ができる

受け入れられることで
長期的な関係性を築ける

ストレスなく過ごせる

ゆったりとした時間を過ごせる

既存の価値観にとらわれない

自分のテイストや価値観に合う

人

自分のペースや価値観が尊重される

自分の思い通りに時間や空間を使える

新しい体験や成長を通じて
達成感を得られる

存在意義を感じられる

匿名性が担保された関係性がある

ゆるく繋がる

- 印象に残っていることとして、高橋さんの家での経験とともに、多くの参加者にとって初めての経験であった「いぶりがっこ作り」や、「鮭の遡上」があげられた。

Q：一番印象に残っていること、理由、その時どのような気持ちになったか



大根のいぶし
家の前の池を見た時

- 初めて見たものだった、喜久子さんが一人でやっていると思うと大変だと思った
- 池を通じて季節、時間の流れを感じる



いぶりがっこを食べた時
高橋さんのお宅

- 人生でとてもおいしいと思ったウイスキーのことを思い出した、期待を超える味だった
- 「暮らしの年輪」を感じた、近所の人を含めて、営みを感じた場所だった



遡上する鮭を見れたこと
喜久子さん

- 教科書でしか見られない
- 実際にある暮らしの「今」を見られた
- 心からすごいと思った、いくらでも便利な暮らしができるけど当たり前に行っている、尊敬の念もあるけど自分にはできない



喜久子さんとの交流

- 文化も世代も違う生活を体験させてもらって、**非日常感**を味わえた
- おもてなしされるだけでなく、一緒に手伝ったことで**協力的で優しい気持ちになれた**
- 人を介すことで**リアリティが出て、ワクワク感が生じる**



鮭の遡上

- 馴染みのない初めての経験だった**ため他の体験は似たような経験をしたことがあったが、鮭の遡上は初めて見た、生命の雄大さを感じた

心地よさの構造

場所

新しい発見や刺激的な発見ができる

受け入れられることで
長期的な関係性を築ける

ストレスなく過ごせる

ゆったりとした時間を過ごせる

既存の価値観にとらわれない

自分のテイストや価値観に合う

人

自分のペースや価値観が尊重される

自分の思い通りに時間や空間を使える

新しい体験や成長を通じて
達成感を得られる

存在意義を感じられる

匿名性が担保された関係性がある

ゆるく繋がれる

- 心地よさを感じる要因として、気温などのストレスがないことや、実家のような安心感、地域への貢献などを通して得られる自らの存在意義などがあげられた

Q: この2日間で、最も「心地よい」と感じたことは何でしたか？



- N/A



- (身体的) 温泉に入ったとき⇒山形についてからずっと寒かったので、ほっとした
- (精神的) 高橋さんのお宅に入ったとき ⇒自身の実家を思い出した、近い距離感で話ができた
- 雪囲いの木を運んだり、手伝いをして喜んでもらえたとき



- まんぷくで眠くなった
⇒実家感のあるところ、ここで寝れたらなあ、居心地がよかった
- 車中から見た景色がきれいだった⇒観光地ではない場所の紅葉なのに見事だった
- マスクを外すと空気がおいしかった、非日常



- お勝手に納豆汁つくっているときや、いぶりがっこの火を勝手につけてたとき
⇒自由に、勝手に動ける時間が居心地よかった
- 人の温かさや協力することの心地よさを発見した
- 正直言って、喜久子さんの家での食事は緊張した
⇒人数が多すぎたし、何を話したら良いか気を遣った



- 普段スノーボードをするので、雪山にいるときは心地よいなと感じている
⇒幻想の森が近いな、と思う反面、寒すぎたので心地よさとは違ったかもしれない
- 喜久子さんのお家の炬燵の所は心地よいなと感じた

心地よさの構造

場所

新しい発見や刺激的な発見ができる

受け入れられることで
長期的な関係性を築ける

ストレスなく過ごせる

ゆったりとした時間を過ごせる

既存の価値観にとらわれない

自分のテイストや価値観に合う

人

自分のペースや価値観が尊重される

自分の思い通りに時間や空間を使える

新しい体験や成長を通じて
達成感を得られる

存在意義を感じられる

匿名性が担保された関係性がある

ゆるく繋がる

- 繰り返し訪れるためには、その土地ならではの人や文化の存在、またその対象に共感できるか、が要素としてとらえられている。

Q：あなたにとって繰り返し訪れる場所に必要なことは何だと思いますか



- 思い出**、人は思い出から成り立っている
⇒人間は忘れる、記憶が人を作っていく、繋がりを持ち続けている方がリピートする
⇒二人で行くときに、再訪時の景色の違いや、**2人の考えの違いに気づく**



- 自分が繰り返し訪れた場所は、バンコク・長崎
バンコク：暖かい気候、やりたいこと（叶えたい夢がある）、**人が温かい**
長崎：友達の家（お母さん）、市内の夜景、ごはん、文化、歴史



- 自分にとって魅力的な場所になること
⇒場所に住む人が大事にしていることに對し、**共感できるか「いいな」と思えるか**
- 人の存在、食事の美味しいところ**（日本はどこでも美味しい）



- その場所ならではの**のものが要るか
- 最上らしさがなんだろうというのがよく分からなかった
- セカンドブレイスの訪れる場所として、**距離は重要だと思う**。東京から2～2時間半がせいぜい



- 人**、たいていのものは他にもある
自分が動く理由は、**その人に会いたいな、話を聞きたいなというのに帰結する**と思う
- 今回は喜久子さんの1対1の時間があって、**認知されていれば**、一人でも行けるかもしれない

心地よさの構造

場所

新しい発見や刺激的な発見ができる

受け入れられることで
長期的な関係性を築ける

ストレスなく過ごせる

ゆったりとした時間を過ごせる

既存の価値観にとらわれない

自分のテイストや価値観に合う

人

自分のペースや価値観が尊重される

自分の思い通りに時間や空間を使える

新しい体験や成長を通じて
達成感を得られる

存在意義を感じられる

匿名性が担保された関係性がある

ゆるく繋がれる

①日常からの逃避

②不利益への没頭

③地域人との共創

④価値観の再認識

⑤旅後も続く関係

- 喜久子さんの暮らしに触れ、自分の暮らしを顧み、喜久子さんの暮らしから取り入れたいところ、あるいは自分の価値観を大切にしたいところについて考えるきっかけとなった様子がうかがえる

Q: 2日間を振り返り、高橋喜久子さんの暮らしに触れて感じたこと、自分自身の暮らしについて感じたこと、見つけ直したいと思ったことはありますか



- 暮らしそのものよりも、喜久子さんのことが気になった
- 東京から来る人にとっては珍しいが、喜久子さんからすると当たり前
⇒そのギャップが面白い
- 喜久子さんの方が人間らしい、しかし今の自分がその暮らしをするのは難しい
⇒これから手作り料理の回数を増やしたい



- 喜久子さんの生活をしたとは思わなかった
- 移住したとしても、精神的に同じようには暮らせないと感じた
- 自身の経験値や価値観がアップデートされていることも関係している



- 暮らし方はいろいろある、なかなか出来るものではない
- あこがれる人はいると思う
- 自分ひとりでは生きていけない、他人と関わらないと生きていけない
- 尊敬の念もあるけど、自分には無理だからできない



- 自分で実践するのは難しいが、喜久子さんの生活の知恵から学べることは多い気がした



- 高橋さんや米仙人は、便利さを享受しない人たちなんだと感じた
- 効率を重視しなくても生きていけるってことだから豊かなことだと思った
- 自分は効率を重視したい部分もある
- 自分にとって生きやすい暮らし方をしたい

心地よさの構造

場所

新しい発見や刺激的な発見ができる

受け入れられることで
長期的な関係性を築ける

ストレスなく過ごせる

ゆったりとした時間を過ごせる

既存の価値観にとらわれない

自分のテイストや価値観に合う

人

自分のペースや価値観が尊重される

自分の思い通りに時間や空間を使える

新しい体験や成長を通じて
達成感を得られる

存在意義を感じられる

匿名性が担保された関係性がある

ゆるく繋がれる

①日常からの逃避

②不利益への没頭

③地域人との共創

④価値観の再認識

⑤旅後も続く関係

- 価値観が近い人の存在や、同じ目的を共有することで、コミュニティの結束が高まりやすくなる
- 自分の価値観と完全に同じである必要はなく、自分の価値観が受け入れられ、相手の価値観を尊重できる環境が重要であるとする

Q：旅を共にしてきた人との交流についての印象を教えてください



- みんなキャリアが違うけど、旅に興味ある人が多い
- みんな話しやすい、もっと話したい



- 人との関わりが好き、ということ意識していることもなく、自然に交流している



- 最初は交流について不安があったが、雪囲いなどみんなで一緒に何かできたことで、やっと仲間感ができた



- たまたま会った人と飲むだけではない、もう少し深い交流がしたいと思った
- 相性が良かった、バックグラウンドが近かった（旅行好き、特別な体験をしたい）



- 人付き合いは得意ではないけど嫌いではない、今回の旅は居心地は悪くなかった
- 割り切って、無理しないようにしている

心地よさの構造

場所

新しい発見や刺激的な発見ができる

受け入れられることで
長期的な関係性を築ける

ストレスなく過ごせる

ゆったりとした時間を過ごせる

既存の価値観にとらわれない

自分のテイストや価値観に合う

人

自分のペースや価値観が尊重される

自分の思い通りに時間や空間を使える

新しい体験や成長を通じて
達成感を得られる

存在意義を感じられる

匿名性が担保された関係性がある

ゆるく繋がれる

①日常からの逃避

②不利益への没頭

③地域人との共創

④価値観の再認識

⑤旅後も続く関係

- 再訪意向について聴取したところ、「知っている人がいる」「認知されている」ことが再訪理由の要素となりうる可能性がみられた

Q:この旅で訪れた場所の中で、また近いうちに訪れたいと思う場所がありますか、またその場所はこの旅で訪れた他の場所とどのように違いますか



- 喜久子さんの家
- 旅館
- 鮭の遡上
(違う時期)

- ・ 時間の厚みを感じる
- ・ 喜久子さんの優しさ、美味しい料理



- 喜久子さんの家

- ・ 喜久子さんに会いたいから



- 喜久子さんの家

- ・ 手伝うから、ご飯を食べたい
- ・ 知っている人がいて、そこに暮らしがある



- 喜久子さんの家

- ・ 1回行っただけでは分からないよさがある
- ・ 季節ごとの魅力、大変さが違うと思うのでそれぞれを体験してみたい



- 喜久子さんの家
- この辺り一帯

- ・ 実際は、今回有象無象の一人だったから一人では行けない
- ・ スキーをするからこの辺りにはもう一度来てみたいと思う

心地よさの構造

場所

新しい発見や刺激的な発見ができる

受け入れられることで
長期的な関係性を築ける

ストレスなく過ごせる

ゆったりとした時間を過ごせる

既存の価値観にとらわれない

自分のテイストや価値観に合う

人

自分のペースや価値観が尊重される

自分の思い通りに時間や空間を使える

新しい体験や成長を通じて
達成感を得られる

存在意義を感じられる

匿名性が担保された関係性がある

ゆるく繋がれる

①日常からの逃避

②不利益への没頭

③地域人との共創

④価値観の再認識

⑤旅後も続く関係

- ・ 帰宅後も、高橋さんとの繋がりや、ツアー中に会った最上ならではの食材との繋がりを望む声が寄せられた
- ・ 一方、必ずしも目に見える繋がりを求めない声が挙がったことも特徴的

Q：帰った後、この地とどんな繋がりを持っていたいと思いますか



- ・ 今回のツアーがなければ喜久子さんの家に行けなかった、思い出になる
- ・ この町は行きにくい
- ・ 喜久子さんの家に友達を連れていきたい



- ・ 最上という地域とは、特に繋がりを持ちたいとは感じなかった
- ・ 喜久子さんとは繋がっていたいと思う（一方で、実際に繋がりを持つような行動をするかは別。SNSで繋がる程度だったら…）



- ・ 山形のイメージ＝真室川になった
（泣いた赤鬼ではなく）



- ・ 納豆を取り寄せる
- ・ 漬物がもらえたら欲しい
- ・ 鮭について調べたい



- ・ 繋がりらしい繋がりは求めておらず、SNSでの繋がりもどちらでもいい
（＝繋がってもいいし、繋がらなくてもいい）
- ・ 今後どこかで最上の野菜等を見た時に自分がここに来たことを忘れないようにしたい

心地よさの構造

場所

新しい発見や刺激的な発見ができる

受け入れられることで
長期的な関係性を築ける

ストレスなく過ごせる

ゆったりとした時間を過ごせる

既存の価値観にとらわれない

自分のテイストや価値観に合う

人

自分のペースや価値観が尊重される

自分の思い通りに時間や空間を使える

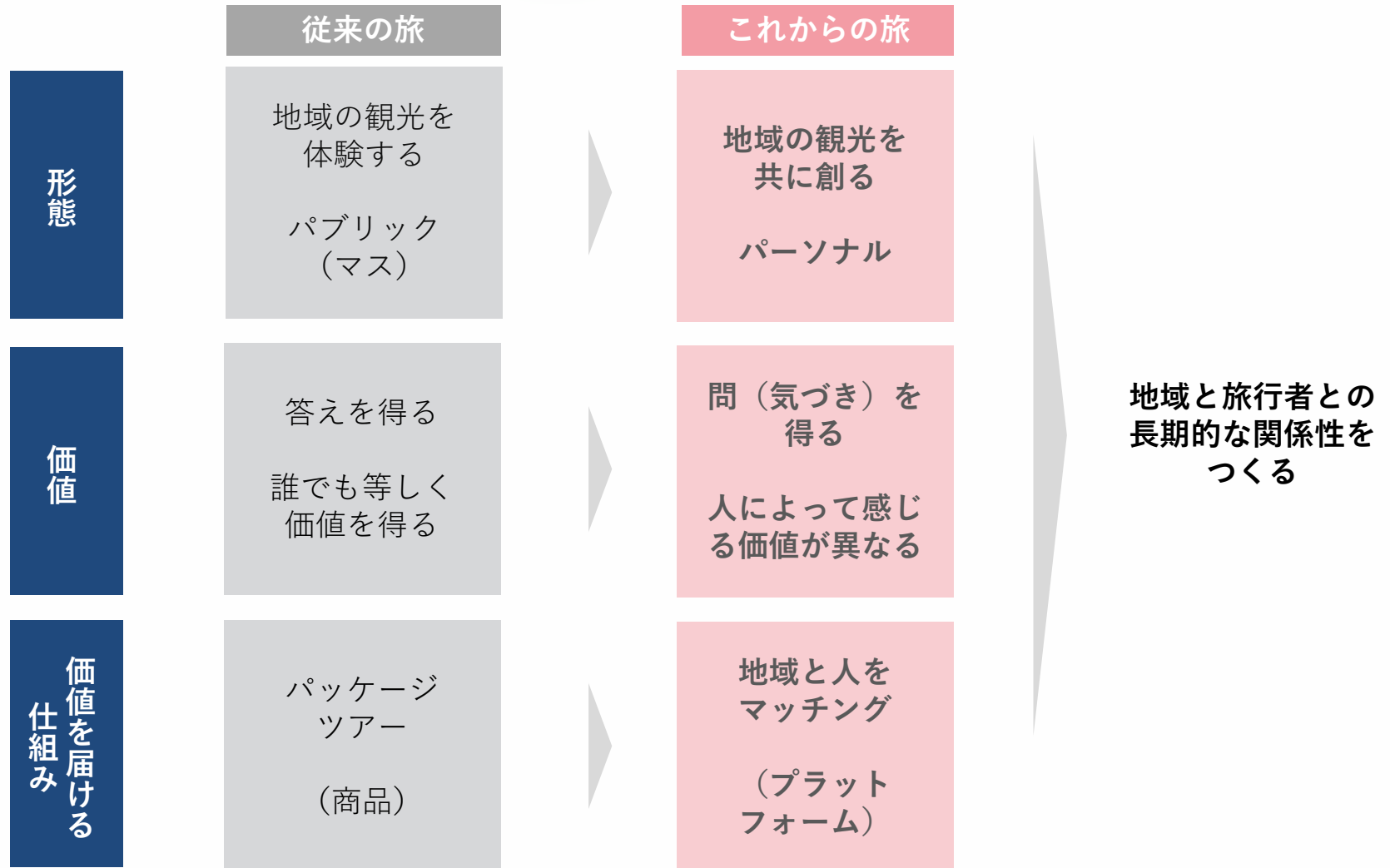
新しい体験や成長を通じて
達成感を得られる

存在意義を感じられる

匿名性が担保された関係性がある

ゆるく繋がれる

これからの旅は、すべての旅行者が同じ価値を得るのではなく、それぞれの旅行者が個々の価値を見つけることが重視される。そういった価値をパッケージツアーで実現していくことは難しい。そのため、地域と旅行者をマッチングさせる場の提供者となることが求められるのではないかな。



地域と人との継続的なつながりを作る（関係人口の構築）ための仕組みづくり

		課題	今後の可能性
1	再現性	✓ 人の魅力に頼ったコンテンツの場合、他の地域での再現性が保てない	✓ ハブとなる人材の発掘と、<u>人材と旅行者とをつなぐプラットフォーム</u>の構築 ✓ 旅行の目的やテーマを絞り、<u>価値観を共有する人を集め、その中で隙間時間を作ることで偶発的な出会いの機会を創出</u>する
2	継続性	✓ 心地よさの提供だけではリピートに繋がらない	✓ <u>気軽に会える人や場所を担保する</u>（地域の偉い人や専門家、一般の人ではなく、宿や店のスタッフの人材発掘） ✓ 旅後にも継続的に<u>緩いかかわり</u>を持つ仕組み ✓ 継続的に新しい情報やコンテンツを発信（<u>飽きさせない工夫</u>） ✓ <u>地域と旅行者の価値観マッチング</u>の仕組み（あなたにおすすめの街探し、など）
3	独自性	✓ 地域にとって、その地域だからできることの具現化や他地域との差別化を図ったツアーの企画・造成、集客そのものへのハードルが高い（＝高橋さんのような<u>「人」の存在</u>は、集客段階では顧客にとって訴求力となりづらい側面がある）	✓ <u>地域が持続可能な着地型コンテンツを開発するためのサポート</u>の提供（旅行会社の外部からのまなざしや、企画・造成～集客のサポート） ✓ <u>地域と地域の人をつなげる「場」づくり</u>

今回の実証実験から得られた新しい旅の形は、従来の「余暇」を過ごすものから価値を与え合うことで自分の場所を見つけることができる「与価」とも言えるものだった。

余暇

持て余す暇を消費する旅

新しい旅の可能性



与価

地域と価値を与え合う旅

体験の過程

地域の「名所」を訪れる（観光）
↓
金銭的対価を払い価値を受け取る（消費）
↓
地域の価値観を学ぶ
↓
自分の価値観を省みる
↓
ストレスの緩和・心身の活性化
（＝リフレッシュ）

1
2
3
4
5

地域の「暮らし」を訪れる
↓
価値を与える／受け取る
↓
互いの価値観を受け入れ合う
↓
自分が自分らしくいられる居場所を見つける
↓
心地のよい場所で心地のよい状態になる
（＝ウェルビーイング）



JTB総合研究所



TBWA\HAKUHODO